

東ドイツの右翼急進主義と青年教育

何が問題だったのか

大串 隆吉

はじめに

1994年9月に短期間であったが、ドイツ連邦共和国のロストック市を訪れ、当地のインゴ・コッホ氏の協力を得て、総合学校（Gesamtschule統合学校とも訳されている）、実科学校（Realschule）、ギムナジウムの校長・教師、ネオ・ナチの若者、反ナチグループの若者、ソーシャルワーカー、研究者などにインタビューをすることが出来た。本報告は、これらのインタビューをもとにしたものである。

ロストック市を訪れたのは、この市で1992年8月末右翼急進主義者などによる難民襲撃事件が起こったからである。ロストック大学では旧東ドイツ時代には反ナチ抵抗運動とナチス時代の青年の研究が盛んに行われていたから、その地で先の事件が起こったのは驚きであった。そこで、その理由を明らかにしたいと考えた。

第一に、その理由として旧東ドイツにおける反ナチ教育になんらかの問題があったのではないかと誰でも考えるであろう。しかし、それについてわが国ではふたつの極端な評価があり、あった。

そのひとつは旧東ドイツでは反ナチ教育が行われていなかったという偏見というべき誤解である。上野千鶴子・田中美由紀・前みち子『ドイツの見えない壁』（1993、岩波書店）、足立邦夫『ドイツ傷ついた風景』（1994、講談社）は、旧東ドイツでは西ドイツとちがってナチス・ドイツの歴史の過去を克服する教育がされてこなかったことを統一後の外国人襲撃事件のひとつの理由にしている。しかし、これが誤認であることは旧東ドイツの歴史教科書をみれば一目りょうぜんである。問題は、その内容と教育方法、教育制度にあった。

他のひとつは、逆にドイツ民主共和国の教育を反ナチ国家の教育として高く評価するものである。あるいはその歴史教科書を高く評価するものである。例えば、東ドイツの「教育の課題は国家の歩みと共に学校の反ファシズム化民主主義化であり、そして社会主義的教育をいかに実現するかという点にあった」^①と評価されていた。又、歴史教科書については、「日本の教科書のようにコンパクトな小事典ではない。内容理解に必要なあらゆる情報を網羅した大物語集または大事典として編集されているのだ」と言う評価があった^②。このような、高い評価が正しかったのだろうか。反ファシズム化のための歴史教育に弱点はなかったのだろうか。旧東ドイツの研究者の分析を紹介したい。

第二に、ナチスの復活、外国人排斥に強く反対する人々も多い。これらの人々も右翼急進主義に同調する人も、同じ教育を受けたのであるから、統一前後の外国人襲撃事件の噴出は教育の問題だけではとらえられない。そこには統一後の社会問題があり、その青年に現れた問題を明らかにする必要がある。

以上の関心を、日本の問題を考え、分析するために持っている。過去から学ぶことは、ドイツだけでなくわが国の課題でもある。旧東ドイツでのその学び方について自己分析が行われている。その自己分析は、わが国の問題を照らす契機にすることができる。

本論を始めるにあたって右翼急進主義とネオ・ナチの区別について述べておく。ネオ・ナチは「右翼急進主義者のなかでその政治的観念を国家社会主義のイデオロギーと世界観に結び付けている」者を言う^③。右翼急進主義は、生物学的出自に基づいて人種（ドイツ人）の優越性を主張した民族共同体的国家主義である^④。このふたつの境界を実際につけるのはむづかしい。これらは外国人敵視を共通項にするが、外国人敵視だけではこれらを意味しない。外国人敵視は、これらのイデオロギーとは別に自己の将来や生活への不安のはけ口として生ずることがあるからである^⑤。

スキンヘッド現象 (das Skinheadphänomen)

スキンヘッドは、1960年代終わりにロンドンのイーストエンドに生まれ右翼急進主義と結びついて行った。西ドイツでは70年代の末に、東ドイツでも80年

代に生まれた。彼らが外国人排斥の先頭に立ち、かつ障害者、ホームレスを攻撃することから注目されており、右翼急進主義の貯水池になっていると見なされている。1992年のロストック事件でも逮捕・告訴された者の多くは彼等を中心とした青年であった。(ただし、1992年10月27日にテレビ朝日のニュースステーションが「ナショナリズム」を特集し、リヒテンハーゲン事件を取り上げ「参加者の圧倒的多数は地元の青年だった」と解説したのは明らかに間違いであった。事件中逮捕された244人の内ロストック在住者は127人、西ドイツから47人、ベルリンから39人他であった。うち、21才以下の青年が50%、若い成人が35%であった。(『Ostsee Zeitung』1992年8月27日)

東ドイツでもスキンヘッドのなかから右翼急進主義を主張する右翼スキンが姿を現した。その組織が発展したのは85、86年であった。彼らは学校、職業訓練の場、住居地、青年クラブで、例えば家にいつかない者やサッカーファンを組織していた。彼らは1987年と88年にはパンクや外国人、同性愛者、左翼、その他彼らが真のドイツ人でないと見なした者に公然と暴力を振るうようになった⁶⁾。

東ドイツ政府は警察によりこれをとりしまったが、1987年10月17日に東ベルリンのツィオンス教会で起こった事件は青年問題研究者に衝撃をあたえ、ライプチヒの中央青少年研究所(Zentralinstitut für Jugendforschung)は調査・分析を始めた。

このツィオンス教会事件とは次の様な事件だった。当日、この教会で西ベルリンの「エレメント・クライム」もまじえたロックコンサートが開かれ、パンクを中心として600人ほどの青少年が集まった。そこに25人のスキンヘッドが、ナチスと同じスローガン「ジーク・ハイル」「ユダヤ人はドイツの教会から出て行け」を叫んで襲撃した。これはネオ・ファシストのスキンヘッドが組織的に行動していることを明らかにしたのである。

この研究所は1988年にスキンヘッドに対する青少年の態度について調査をおこなった。そのベルリン、ロストック、カールマルクスシュタット、マグデブルグ、ドレスデン、フランクフルト/Oの地域別集計によれば、共感する者は2%から6%、同調する者は1%から6%、なんらかの意味で理解できる者は

22%から43%，拒否するものは53%から74%であった。特に首都ベルリンでは同調者6%，共感する者6%になっていた⁷⁾。

青少年研究所のW・ブリュックは、パンクやスキンヘッドなどの問題グループの存在は絶対的少数として扱われ、無視されてきたが（旧東ドイツ政府は、ナチ的なグループは存在しないことにしていた）、それらは社会的現実の一つであり、青年の社会的不満の表示器であると指摘し、その質を分析した⁸⁾。

このW・ブリュックの指摘は現実性があった。なぜなら、この時期この研究所の調査では、青少年のドイツ民主共和国への一体観が極端に落ち込みはじめていたからである。一体観を強く持っていた青少年の割合は、1975年に徒弟57%，青年労働者53%，学生66%であったが、88年5月にはそれぞれ28%，32%，52%に落ち込んでいたのであった⁹⁾。

ブリュックはスキンヘッドになる道を次のように指摘していた。普通の青年の中で不満を持ったグループがスキンと結びつく。サッカーファンがスキンになる。なぜなら、週末のサッカー場は家庭・学校・工場での日常的な不満と欠乏感の最も簡単なはけ口の間であるからである。パンクの一部がスキンになる。スキンによるパンクは墮落して無気力であるという攻撃が、パンクに影響を与え一部をこの生活態度から離れさせスキンにむすびつける。

軍隊で軍事を好むようになり、自分の失敗から軍人になれなかった若者が、スキンの軍事への偏愛と結びつく。犯罪者と前科者がスキンと結びつき中核グループとなっている。彼らはスキンの最も破壊的な部分で、彼らのアウトサイダー的心情は右翼急進主義的スキンできわだっている。

ブリュックは、右翼急進主義的スキンの思想・態度を次ぎのように特徴づけていた。すなわち、「ドイツ性」は緊張と規律にあると単純に考えられ、そこに「ドイツ人であること」の誇りが求められる。「ドイツ民主共和国はドイツの一つである。ドイツ人は清潔だし、清潔でなければならない。パンクとグルフトスはその服をみれば完全に非ドイツ的だ」。そして、トルコ人、黒人、ベトナム人などの外国人敵視、反ユダヤ人、反共産主義者を特徴とする。トルコ人が入っているのは西ドイツの影響があることを示している。したがって、ファシズムの過去の歴史を伝えるという重要な課題があるが、しばしば家庭で祖父

がナチ時代の兵士としての体験を「単なる思い出」として無批判に語ることが影響を与えているという。

そして、東ドイツ政府に警告した。「ドイツ民主共和国国家は若者と本物の関係を持っておらず、若者の中で何が起きているか知らない。彼らは大人と仕事仲間の中で賛美者と同調者を持っていると強調しているのに」⁽¹⁰⁾。この警告は、統一後に重大な問題になるのだが、当時の東ドイツ政府は無視した。

スキンヘッドの姿

スキンヘッドの出身階層はどうなっていたのか。ブリュックが指摘したように、ある職業的出身階層から特徴づけることは出来ない。旧東ドイツの刑事警察は、1987年から89年にかけて告訴された右翼急進主義者（その多くはスキンヘッドだと考えられる）の年齢、両親の職業をまとめた⁽¹¹⁾。それによると、年齢は18歳以下15%、18歳から19歳38%、20歳から21歳22%、22歳から25歳22%、26歳以上3%であった。右翼急進主義者は完全に青年からなっていた。

両親の出身階層は、知識人（大学卒）24%、専門労働者あるいは熟練工47%、手工業者（職人）14%、未熟練工15%となっていた。1988年の就業者の学歴構成は大卒8.8%、専門学校卒とマイスター試験合格者が20%、熟練工資格取得者が67.4%、その他3.8%であった。職業別構成では手工業者が（生産協同組合と自営業の）8.5%であった⁽¹²⁾。したがって、知識人と手工業者、未熟練労働者を親に持った者からの割合が相対的に高かったと言えるが、特定の親の職業からの出身者が多いと言うわけではなかった。

筆者が聞き取りをした総合学校の教師によれば、特定の親の職業にかたよっているわけではないが、知識人の子どもがグループの指導者になる傾向があると言う。親の職業的階層よりも家庭や学校への不適応が原因ではないかと述べていた⁽¹³⁾。

この家庭や学校への不適応が原因ではないかと言う指摘はある程度確かめられ、しかも東ドイツ特有のことではなさそうである。例えば、東ドイツと西ドイツ出身のスキンを比較分析したベーンケンとフィッシャーは、両者に予想していたより共通点が多いことを指摘している⁽¹⁴⁾。共通点とは家庭の崩壊と学校

での挫折、サッカーファン、歴史特に戦闘の歴史への関心が強いことである。彼らの分析例では次のようになる。

西ドイツ出身のベニトは両親が離婚し祖母にあづけられたが、青年になって青年宿舎に住む。ギムナジウムに行きアビトーアをとりたかったが、結局基幹学校しか卒業できなかった。東ドイツ出身のデニスは、親が離婚したため兄弟が別れ別れになり、彼は父親と住んだ。学校は退屈であった。なぜなら、歴史が好きだったが、歴史の授業は生徒の意見が尊重されず、公式に認められた回答だけが評価されたからである。(旧東ドイツでの歴史教育の問題は後でとりあげる) 彼らは早くから居酒屋や、酒の飲み仲間、サッカーファンのなかでスキンと知り合って行った。

しかし、家庭崩壊(これは、核家族の崩壊だけをささない。旧東ドイツは離婚、母子家庭が多いからである。なお崩壊とは精神的なものをここでは含まない)だけをスキンが生まれる理由としてあげるには無理がある。なぜなら、旧東ドイツは離婚率が高く、したがって家庭が崩壊した者からスキンがすべて生まれるわけではないし、コルフェスがあげた旧東ドイツの3人のスキンは家族が崩壊していない⁽¹⁵⁾。

ただここで指摘しておきたいのは、ドイツの統一後になると、家族崩壊にも統一後の社会問題があらわれていることである。例えば、私がインタビューしたスキン(21歳)、フォーゲルは次のような経歴の持ち主であった⁽¹⁶⁾。

フォーゲルがスキンになったのは3年前、したがって統一後であった。フォーゲルの両親は社会主義統一党の党员で、父はある工場の党幹部をしていた。統一前後に父は離党し、父母は離婚、母は再婚した。その後母親とは接触していない。フォーゲルは一時ガソリンスタンドに勤めていたが、そこが倒産したため失業、そのため彼は青年宿舎に住むようになった。

青年宿舎は、登録団体・ハンザシュタットロストック青年宿舎(Jugendwohnen Hansestadt Rostok e.V)の管理下にある。この団体は、16歳から21歳の青年に社会的教育学的に援助する住生活(sozialpädagogisch betreutes Wohnen)を世話することを目的としている。担当であるソーシャルワーカーブリーゼ女史によれば、フォーゲルの入居している住居はリヒテンハーゲンに

ある3住居のひとつで、ここには15の部屋がある。ここには12人の青年が入居しており、一人の女性を除いて男子の右翼急進主義のスキンの青年である。両親に住む所がないか、両親が離婚した者である⁽¹⁷⁾。

フォーゲルによれば、この住居でスキンの青年は不満や悩み、右翼過激主義の行動について話しあっている。いわば彼らのたまり場になっているのである。ブリーゼ女史によればこうした居所の無い青年を右翼急進主義者は意識的に組織しようとしているという。これでは、ソーシャルワーカーの意図とはちがったものになってしまっている。フォーゲルによれば現在ロストックに30名前後のスキンがいる。

もうひとつの例をあげよう。リヒテンハーゲン事件に参加したロストックの二人の男子青年と女子青年の場合である。一人の男子青年の両親は西に行き、その女友達は父親が西に行き再婚、母親も再婚し、彼女が住んでいる所には二・三週に一回訪ねてくるだけになった。三人とも失業中であり、ひとつの住居に住んでいる⁽¹⁸⁾。

ここにあげた例は少ないが、失業と新たな家庭崩壊が背景にあることをうかがわせる。新たな家庭崩壊と言う意味は、統一後に新たに生じた理由による親の離婚と言う意味である。旧東ドイツでは離婚率が高く、母親だけの家庭の割合は西ドイツより高かった。それは、彼ら・彼女らおよび子どもが不利益を受けないという社会的保障に基づいていた。この時代の離婚などの理由ははっきりしないが、先にあげた例はあきらかに今回の統一後におこった理由である。くりかえしになるが、家庭崩壊の青少年が即スキンになるわけではない。居所の無い青年を右翼過激主義者が組織化の対象にしているところに問題が生じるのである。

ところで、失業の状況であるが、西より東の方が失業率が高いことは指摘されている。ロストックのあるメッケルンブルグ・フォアポメルン州の1992年の失業率は16.8%で全国で一番高かった。ちなみに同じ旧東ドイツの東ベルリン14.3%、ザクセン13.6%、ザクセン・アンハルト15.3%で、旧西ドイツで一番高いのがブレーメンの10.7%、最低のヘッセンが5.5%であった⁽¹⁹⁾。

ロストックの失業率は、1991年12月の14.2%が92年12月に16.4%に増加し、

メッケルンブルグ・フォアポメルン州では同時期13.8%から17.6%に上昇していた。それに応じてこの州の就業者数は激減した。統一前の1989年を100とした指数は、1991年72、92年63に落ち込んだ。失業者の半数は女性で、その失業率は1992年5月の時点で20%にたっし、25歳以下の青年の失業率は13.7%であった⁽²⁰⁾。

青年にとって深刻なのは学校卒業後のデュアル・システムとしての職業訓練の場が不足していることである。東ドイツでは1994年の卒業生中約11000人が訓練の場を持たず、新たに5000人の場が確保される見通しがあるだけだと報道されていた。これでは、約6000人の青年に職業訓練の場がない事になる⁽²¹⁾。資格社会のドイツで職業訓練の場を持たないことは死活問題である。この失業問題は右翼過激者の影響をうけやすい理由となっている。

なぜ、ナチスカ

フォーゲルは、ヒットラーに引かれる理由を次のように言う。ヒットラーは、外国人労働者なしに失業をなくし、住宅を沢山作ったと。ヒットラーが自由主義者、共産主義者、ユダヤ人などを弾圧したことにたいしてどう思うかという質問には、それはどうでもいいことだと答えている。

なぜ、ヒットラーが失業をなくしたことに関心を持つのか。彼は次のような体験をしている。ある工場に職を求めて行ったが採用をことわられた。その工場には少なくともふたりの外国人労働者が働いていた。そこで彼は考えたのが、外国人労働者がいなくなれば失業もなくなるということである。

ヒットラーが失業をなくした、外国人がいなくなれば失業がなくなるという評価は、フォーゲルに限ったことではなく、スキンに共通しているようである。先に挙げたベーンケとフィッシャーが追跡した東ドイツ出身のスキン、デニス(仮名)は次のようにナチスの時代を評価している。「働く場を充分作り、我々が今でも利用できるアウトバーンを作り、ドイツ人が世界に誇れるものをもった」と⁽²²⁾。

しかも、この評価はスキンだけでなく青年のある部分も共有している。1992年10月から93年1月にかけてドルトムントFORSA研究所が行った全ドイツの

青少年の調査によれば⁽²³⁾、「ナチスは悪い面だけだったのか、それともいい面もあったのか」という問いに、いい面もあったは43%であり、そのうち45%が失業をなくしたこと、13%がアウトバーンをつくったことと答えている。すなわち、回答者の20%が失業を無くした、6%がアウトバーンを作ったといういい面をもってたと評価したことになる。さらに「ナチスは結局呼びもどされるべき過去の一部なのか、それともこんにちもなお対決が必要なのか」の問いに対し、26%が「呼びもどされるべき過去の一部」と答えている。したがって、ほぼ4人に1人がナチスを積極的に評価していることになる。(これらは東西ドイツで大きな差はない。差があるのは学歴であって、ギムナジウムの生徒にはこれらの支持者は極端に少ない) フォーゲルの意見は一定の支持を得ていることになる。

これに加えて「ドイツ人の誇り」が問題となる。フォーゲルは、日本人が日本人であることに誇りを持つように、ドイツ人はドイツ人であることに誇りを持たなければならない、ヒットラーは大ドイツ人である誇りを与えた、と言う。したがって、彼はドイツの統一はポーランドなどのドイツ人とのまとまりをつくる可能性を与えたと評価し、ドイツは巨大にならなければならないと言う。現在旧東ドイツの人が二等国民と呼ばれることがあるが、彼によれば西のスキンは二等、一等と区別せず、東と西のスキンはうまくやっている。これは、彼が体験からドイツ人としての連帯、まとまりを実感し、全ドイツ人としてのまとまりをつくる可能性を信じているとされていると考えられる。

それでは彼はどこでナチスについての知識を得たのであろうか。彼の場合、ブリュックが指摘したような親や祖父母からの影響はない。彼のひいおじいさんがSSであったが、ひいおじいさんはそのことを恥じていた。しかし、叔父はルドルフ・ヘスのビオグラフィを書いていて彼に影響を与えたようだ。そのほか、右翼急進主義の政党の集会に出たり、第二次大戦についての本を読むという。学校の9学年で反ファシズムの歴史教育を受けたがほとんど興味を持たなかった。なぜなら、教えられる事とちがう発言は禁止されていたからだと言う。これは先にみたデニスと同じ経験である。

一人では社会を変える事は出来ないが、沢山いれば変える事が出来ると言う。

そのために何をしているのか。そのひとつは、先に述べた友人・友愛 (Kameradschaft) 関係をつくることである。マイヤーによれば、右翼急進主義者は全く普通の方法、友人関係・友情・徒党的グループ・結びつきによって青年を組織し、行動の中で自己主張と仲間意識を作っていると言う⁽²⁴⁾。

ネオナチの著名な指導者であったハッセルバッハは、この点について次のように書いている。「若い連中には彼らがいかに『友愛』(Kameradschaft) のためにだいじにされているかという感じが与えられねばならなかった。我々に話しかけてきた多くの若者は、欲求不満だった。彼らは将来の見通しを持っていなかった。私は彼らの自尊感覚を高めるために、彼らをおりに触れてほめた。そのようにして彼らを認める事は、我々が『友愛』となづけた社会に彼らを依存させた。この『友愛』は多くの者にとって彼らがやめることが出来ない一種の麻薬になった」。これは「ナチへの学校」であった⁽²⁵⁾。

「ナチへの学校」はこれだけではない。行動と訓練である。それは外国人を排撃する行動と共に、ナチ的示威活動と戦闘訓練である。フォーゲルは、ナチ的示威活動、戦闘訓練はドイツでは禁止されているので、禁止されていないイギリスで行い、その際にイギリスの右翼急進主義者の援助を受けていると言う。

84年歴史教科書のナチス叙述

反ナチ教育の問題をみるために歴史教育を取り上げてみよう。もちろん、旧東ドイツの反ナチ教育を全面的にみるのは公民科 (Staatsbürgerkunde) や自由ドイツ青年同盟 (FDJ) の活動を見なければならないが、ここではその準備がないことと、歴史科に歴史的意識を見ることが出来るので歴史教育を考察する。

旧東ドイツの義務教育は1965年から10年間となった。歴史科は5学年から始まり卒業まで続いた。

教科書は、1951年、57年、61年、70年、84年、88年に発行・改訂されている。今ここで問題となるのは、スキン達が教わった1970年と84年の教科書 (1970年のものは、木谷勤・井代彬雄訳『世界の教科書=歴史ドイツ民主共和国4』ほるぷ出版、1983参照)、特に84年なのでこれを中心に述べよう。この二種類の

教科書ではわが国のように日本史、世界史にわかれておらず、ドイツ史を中心に無階級社会から現代まで学年毎に進行し、ナチの時代はロシア革命から第二次大戦までを9学年で教えられていた。

その9学年の教科書(『歴史9』)の84年版では次の構成となっていた。第一章大社会主義10月革命とその国際的影響、第二章ドイツの11月革命1918/19、第三章20年代から30年代半ばまでの国際的出来事、第四章1919年から1933年までのドイツ人民の歴史、第五章ドイツにおけるファシスト独裁とファシズムと戦争に反対する国際的ならびにドイツの労働運動、第六章第二次世界大戦とその結果。このうちナチス時代は第五章、第六章である。参考のために第五章、第六章の項目を紹介すると次のようになる。

第五章ドイツにおけるファシスト独裁とファシズムと戦争に反対する国際的ならびにドイツの労働運動

- 1, ファシズム独裁の確立
- 2, ファシズム独裁の強化
- 3, 反ファシヨ抵抗闘争
- 4, 軍備拡張経済政策
- 5, 外交の面と軍事的面での戦争準備
- 6, イデオロギー上の戦争準備
- 7, 共産主義インターナショナル第7回大会とドイツ共産党ブリュッセル党協議会
- 8, スペイン人民の国民的・革命的闘争
- 9, ファシスト国家の最初の侵略行動
- 10, 統一・人民戦線をめぐる闘いとドイツ共産党ベルン党協議会
- 11, 戦争の危機の増大
- 12, 第二次世界大戦前夜の力関係

第六章第二次世界大戦とその結果

- 1, 第二次世界大戦の勃発
- 2, 1941年夏までの戦争の経過
- 3, ソヴィエト連邦へのファシストの奇襲

- 4, ファシズムに反対する諸国人民の闘争
- 5, 戦争の転換
- 6, 戦争の転換の影響
- 7, 1942から1944までのドイツ人の反ファシヨ抵抗闘争
- 8, 東・南東ヨーロッパの解放と第二戦線の展開
- 9, ヨーロッパと極東におけるファシストの侵略の敗北
- 10, 第二次世界大戦の結果
- 11, 第二次世界大戦の教訓

ナチスドイツの他国民・他民族への犯罪は、水晶の夜、強制収容所における殺害などがとりあげられている。強制収容所におけるナチスの残酷さが、化学コンツェルンと収容所との手紙であきらかにされている。そして、ナチスイデオロギーは人種理論と反ユダヤ主義を要素としていることが強調され、ユダヤ人迫害の基礎的な年表が掲げられ、約6百万人のユダヤ人が殺害されたことが書かれている。

ファシズムの規定はデミトロフによるそれによっている。ナチスへの抵抗闘争はドイツ共産党を中心に叙述され、第六章で反ドイツファシヨ連合でソビエトが一番大きな役割をはたしたことがつけ加わる。例えば次のように。「ヒットラードイツを敗北させた最大の力はソヴィエト連邦の国民の勇敢な闘いであった」(184P)そこで、ソヴィエトの軍事的反攻と勝利が詳しく叙述されている。そして、1939年のドイツ・ソヴィエト不可侵条約は、フランス、イギリスのドイツとソヴィエト間の戦争勃発の期待と日本のモンゴル攻撃に現れたソヴィエト攻撃の危険性をさけるために結ばれたとされ、その際のポーランド分割の秘密のとりきめについてはふれられていない。

ドイツ国民の反ナチ抵抗闘争はドイツ共産党を中心に描かれていたが、ドイツ共産党の誤り、例えば、社会ファシズム論、それによる方針の混乱やソヴィエトの外交政策などの誤りにはふれられてなかった。そのため、「ドイツのファシズム反対者たちの献身的な闘争にもかかわらず、彼ら自身の力でファシズム独裁を打倒し、ドイツ・ファシズムによって始められた第二次世界大戦の勃発を防ぐことは出来なかった」(146P)という正しい結論も、ドイツ共産党

の方針は一貫して正しく、力が足りなかったから、ソビエト連邦に解放されたと理解されるようになっていた。また、第二次大戦からの教訓として挙げられた「諸国の勤労者階級の統一戦線ができていたなら、それだけが戦争渴望勢力の戦争への道を妨げることができたであろう」(183 P) という正しい命題も、社会民主党右派がその統一戦線を妨げた責任を一手に引き受けることになっている⁽²⁶⁾。

問題にされた反ナチ歴史教育

こうした歴史把握と歴史教育に公然と批判が出されたのが1989年2月1日に旧東ドイツの歴史家会議が開かれた時であった。そこで、ナチス認識とかかわって歴史教科書に対する批判が参加者から出された。その会議のことは公表されなかった。幸いな事に、この会議に出席したフランク・シューマンとヘルマン・ラーガーが、自著のなかに自分の発言を収録している。

シューマンは、郷土史の学習がされて、より歴史が生徒の身近になり、強制収容所の見学などもされているにもかかわらず、またスキンに反対する若者が少なくないにもかかわらず、歴史教育を発展させるには次のような青少年の疑問に答える必要があるという。「なぜ、私達の祖父母と両親は社会的な非人間的行為におちいったのか、しばしばそれに協力したのか？ 彼らはここで社会主義国家の市民として生活している。彼らは、彼らがかかわった過去について何故語らないのか？ 彼らは沈黙し、何かを追い払っている、その結果が私達の教育に否定的な結果をもたらしたにちがいない」⁽²⁷⁾

ヘルマン・ラーガーは次の意味のことを発言した。「国民教育の礎柱として反ファシズム教育は一般に認められてきたが、教えられているファシズムの像は非常に損なわれていた。低学年の公民科教科書はこどもの視野をただ敵対関係、すなわち一方で反ファシヨ抵抗者、他方でファシストの手先に固定した。数百万の同調者、魅せられた者、信奉者の責任についてのすべての情報が欠けていた。そして9学年と11学年の歴史授業は、これらの人々を免罪したゲオルギー・デミトロフのファシズム定義を利用した。彼の定義ではすべての責任は『独占資本の反動的な、最も排外主義的で最も帝国主義的な要素』

の責めに帰せられていた」⁽²⁸⁾

この二人の批判を整理すると、1、ナチスの批判は指導者、「手先」に限られるのではなく、同調者の問題においてもとりあげられるべきである、2、抵抗者対ナチスという図式は修正されるべきである、3、したがってデミトロフのファシズムの定義では不十分であるということであった。これらは、歴史教科書に対するまっこうからの批判であった。この批判は、旧東ドイツの教育が万事うまくいっていると主張していた政府当局者のうけいれるところとならなかった。

このことはまた、研究と教育のかい離を意味していた。「この問題に真剣に打ち込んでいた旧東ドイツ北部の研究者と教師は、新しい研究成果、例えばヒトラードイツの青年の状況、ユダヤ人迫害の規模、ファシズム時代における日常生活等を教科書と授業に導入しようと努力したが徒労に終わった」⁽²⁹⁾また、インゴ・コッホによれば、研究者の間ではドイツ共産党は反ファシズム抵抗運動に指導的位置を占めることが出来なかったという認識が強くなっており、こうした新しい認識が教師の研修の場で研究者により報告されたが、それは教科書との記述と矛盾をきたすことになった⁽³⁰⁾。

ところで、同調者とは、戦後断罪されたナチスの指導者、確信的な行為者ではなく、消極的であれナチスを支持した者であった。彼らの戦争認識を変革するために、彼らを被害者としての観点からもとりあげるべきだったと自己批判的に問題にされてもいた。ペッツェルトは次のように指摘した。「我々は鉄兜の下で死んだおじいさんやひいおじいさんのことをもどこかで思い起こしたいという子や孫の必要性を無視した。我々は『戦死』、『戦死』は単純でなく、非常に無惨に戦争中に死んでいるという言葉将我々の使用言語から抹消しなければならなかった。我々は戦争中のドイツ人の死を感受性豊にほとんど扱わなかった。それを私は、現在他の失敗と同様に高いつけを払っている失敗だと思う」⁽³¹⁾。

これは被害の問題を位置づけなかったということである。エルスナーも同様の指摘をしている。すなわち、メッケルンブルグ・フォアポメルンでは東（例えば、東プロイセンやポーランドなど）からのドイツ人の避難民が戦後住民の

半数をしめた。しかし、彼らの困難な経験については公開の議論にならなかったし、党や国家はこうした嫌な事実を学校や教科書に反映させなかった。

私がインタビューした歴史の教師には親や祖父母の戦争体験をとりあげたものがいたが、非常に困難であった。なぜなら、親や祖父がそれをほとんど話さない場合、また祖父母が今でもあのときは良かったという場合に、生徒自身が調べなければならなかったからだという。(シュテハン・ヤンツェン総合学校の歴史科教師の発言、9月8日同学校にてのインタビュー)

しかし、思うに、困難は生徒自身が調べなければならないことにあっただけではないであろう。それは教師自身にもあった。すなわち、教育における自由の問題である。

インゴ・コッホによれば、教師は教科書を確信を持って教えなければならず、教科書と矛盾する生徒の質問には答えることが出来なかった。ゲーテプラッツギムナジウムの校長は、例えばソヴィエトでのドイツ人捕虜の強制労働や東からの避難民の犠牲の問題をとりあげるとはタブーであったし、そもそも生徒の親にはSEDやSSD(国家公安局)の幹部などがいるからとてとりあげることが出来なかったという。したがって、前記の教師の試みはこうした状況では成功の保障はなかった。(その点では前記の教師は勇気があった。避難民の犠牲の問題、ソヴィエトでの強制労働の問題は、ソヴィエト軍がナチスからの解放の中心部隊という教科書の結論に単純にはならなくなる。)

エルスナーによれば、授業で生徒の疑問に答え、公然と議論することは特に1980年代に必要なだと認識すべきであった。その理由は、第一に戦争を体験した世代、祖父母・親は、自らの体験からナチスの問題性をつかめる条件をもち、新たな思想と対決せねばならなかったし、対決し、多くの人々がファシズムに反対するようになった。しかし、若い世代には戦争の体験がない。第二に、若い世代が親や祖父母がどう戦争を思うかを問うた時、親の説明は教科書のような場合があった。なぜなら、親には家で大きな支えだったのはロシアと闘ったことだと説明する者がいたからである。第三に、西ドイツのテレビ番組を公の場では見ることが許されないが、家では見ることが出来るようになったため、表と裏を知るようになったからである。第四に生活状態の事実と政府の

公式な宣伝とのかいりが目立つようになり、生徒が教師の言うことに不信感を持つようになったからである。

以上の問題提起は1988年頃から始まっている。それを促したのは、すでに見たスキンヘッドの登場とソヴィエトでのゴルバチョフの登場であった。ゴルバチョフの自由化政策の影響を受け旧東ドイツでは知識人を中心にした問題提起が活発となった。しかし、それは遅すぎたと言うべきだろう。

まとめにかえて一反ファッショの青年のことなど

以上で見たように、旧東ドイツで反ナチ教育は行われてきた。しかし、それは様々な欠点をかかえてきた。その反ナチ教育は、ドイツ共産党対ナチスという歴史の単純化とソヴィエトの過大評価によって損なわれ、研究の成果とのかいりが起こっていた。それだけではなく、一般庶民のナチ時代の行動の事実と敗戦にともなう経験と感情とのかいり、教育の自由の欠落があった。これは、青年の日常生活で伝えられる情報と歴史教育とのかいりをもたらした。

これらの問題は、1988年ころから旧東ドイツで議論されていた。しかし、それは政府との矛盾として現れ、少なくとも89年ホーネッカー退陣まで政府の受け入れるところとならなかった。この問題点の克服のための問題提起は、わが国と全く無関係のことではない。依然として続く15年戦争における責任をあいまいにする発言や、「大東亜戦争」肯定論がある。これらを一部政府要人だけの発想と考えるのは無理がある。それは一般庶民の一部にも存在する。また、戦争を認識するときの世代間の経験の違いなども生まれている。

右翼急進主義の発生の理由は、様々に議論されている。ここでふれたことから、先行世代の戦争認識のあいまいさ、前述の歴史教育の欠点、失業などの社会不安、家庭や学校・職業選択における青少年の挫折感をあげることができる。このほかに、家庭内・校内暴力、いじめの頻発、メディア（漫画・テレビ・コンピューターゲームなど）の暴力肯定的作品の影響が挙げられている。

それでは、右翼急進主義者に反対する教育活動はどうなっているのだろうか。第一に反ナチスの青年達がいる。私は、ロストックの彼らの事務所で9月13日に会うことが出来た。会ってくれたのは、12名の青少年で、大学生、失業

青年各1名を除くと、13才から19才の若者であった。彼らは、「人種主義に反対するヨーロッパの青年」(Jugend gegen Rassismus in Europa, 本部はブリュッセル)のドイツ連邦会議(本部はフランクフルト)のロストック地区グループの会員である。この組織は、「ヨーロッパにおける人種主義の拡大と右翼の増加と闘う。人種主義とファシストに反対する可能なかぎり広範な組織を動員しヨーロッパの青年を結び付ける」ことを目的としている。(Programm von "Jugend gegen Rassismus in Europa")

彼らが語ってくれたところによると、彼らは、様々な人種の人々が普通に同じ地域で生活できることを理想としている。色々なものを買えるようになったのはいいが、親たちは、失業などがひどい中で生活するのに精いっぱい、こうしたことに関心を持ってない。家では議論しないし、政治家は統一すれば生活は良くなると言ったが、失業は増えるし、家賃は高くなっているから、外国人がいなくなればいいと思っている。私達は典型的な若者ではない。私達のようなのは学校では少ない。生徒はこうしたことには無関心で、学校を卒業後どうするかに主な関心がある。ロストックから出ていく人が多いのは不満だ。

彼らは、ナチスのことは学校で習ったという。そして、このグループでビデオや雑誌、新聞で学習している。10人の若者のうち2人が基幹学校の生徒で他はギムナジウムの生徒であった。各種の調査でもギムナジウムの生徒が他の学校の生徒に比べ、反ナチの意識は強いから、それはここにも現れている。私が驚いたのは、これらの若者が日本では中学生から高校生であり、最も活発に発言したのは13才の女生徒であったことだ。こうした若者やファシズムに反対して彼らを援助する大人達がいるのは、一つの可能性を示している。(彼らはSPDの建物を借りており、PDSとも結びつきがある)

第二に反ナチ、反右翼急進主義に反対する学校及び成人教育はどうであろうか。今回統一後の学校教育のとりくみについて充分聞くことができなかったが、次のようなことがある。外国人との交流が旧東ドイツ時代に充分でなかったと反省している教員は、例えば、ジプシーとの文化的交流に取り組んでいる。他方で、青年だけでなく大人の失業問題が解決されないとだめだという考えの教員もいる。

成人教育では、フォルクスフォッシュューレで「反ヒットラー」「メッケルンブルグの教会の抵抗と抵抗党派」「多文化教育」の講座が開かれ、ロストックヨーロッパセンターでは「メッケルンブルグの国家社会主義」の講座や「多文化統合」の会議が開かれている。

第三に、様々な挫折から右翼急進主義に近づくことから彼らにカウンセリング的に対応している（これは社会的教育学と呼ばれている）。これは、先述した青年宿舎や登録団体「Balance of Power」によって行われているが、幾つかの問題があるようだ⁽³²⁾。

-
- (1) 世界教育史研究会編『世界教育史大系12ドイツ教育史Ⅱ』講談社、1977、184p
 - (2) 伊東亮三「授業のための物語的大教材集東独歴史教科書」『歴史地理教育』367号、1984年5月
 - (3) Bundesministerium des Innern (Hg) 『Verfassungsschutzbericht 1992』1993、95p
 - (4) 前掲書、68p
 - (5) Eva-Maria Elsner/Lothar Elsner 『Zwischen Nationalismus und Internationalismus-Über Ausländer und Ausländerpolitik in der DDR 1949-1990』Norddeutscher Hochschulsschriften Vlg 1994、64p
 - (6) Manfred Otto/Gerhard Wenzke 「Punks, Heavys, Grufties-informelle Gruppen in der DDR」Jugendwerk der Deutschen (Hg) 『Jugend '92』Leske+Budrich 1992 および Peter Kodderitzsch/Leo Müller 『Rechtsextremismus in der DDR』Lamuv 1990 12p 参照
 - (7) W. Brück 『Skinheads im Meinungsbild Jugendlicher』Zentralinstitut für Jugendforschung 1988、
 - (8) 同『Das "Skinhead"-Phänomen aus jugendkriminalologischer Sicht』ZI für Jugendforschung、1988、3p
 - (9) Walter Friedrich/Hartmut Griese (Hg) 『Jugend und Jugendforschung in der DDR』Leske+Budrich 1991、139p
 - (10) W. Brück 前掲書、14p
 - (11) Peter Kodderitzsch/Leo A. Müller 前掲書 19-20p による
 - (12) Die Staatliche Zentralverwaltung für Statistik (Hg) 『Statistisches Taschenbuch der DDR 1989』Staatsverlag der DDR、1989
 - (13) 1994年9月8日シュテハン・ヤンツェン総合学校で校長及び4人の教師とのイン

タビュー

- (14) Imbke Behnken/Arthur Fischer 「Gesamtdarstellung und biografische Porträts」前掲『Jugend 92』
- (15) Gunbild Korfes 「Seitdem habe ich einen dermassenen Hass」 Karl-Heinz Heineman/Wilfried Schubarth (Hg) 『Der Antifaschistische Staat entläßt seine Kinder』 Papy Rosa 1992
- (16) この青年とは、写真をとらないこと、ドイツでは報告しないことを条件に、エバースハーゲンの喫茶店で9月12日会った。名前を仮にフォーゲルとしておく。
- (17) Sabine Brise 女子には1994年9月12日、ロストック・エバースハーゲンのレストランでインタビューを行った。
- (18) Heiko Gebhardt/Uli Hauser 「Jugendliche in Rostock: Wir sind euch doch scheisseegal」 Rolf Schmitd-Holz (Hg) 『Un-Heil über Deutschland』 Gruner+Jahre AG & Co. 1993
- (19) Statistisches Bundesamt 『Statistische Jahrbuch für Bundesrepublik 1992』1993
- (20) Statistisches Landesamt 『Statistisches Jahrbuch Mecklenburg Vorpomern 1992』1993
- (21) 「Im Osten suchen noch 11000 eine Lehrstelle」『Ost See Zeitung』16.9 1994
1992年9月2日の同紙は「1100 Jugendliche ohne Lehrstelle」と題して、ロストックで1100人の青少年の職業訓練の場がないと報じていた。事態は改善されていない。
- (22) 前掲『Jugend 92』151p
- (23) Ulrich Völklein 「Geschichtslueken. Was wissen die jungen Deutschen über das Dritte Reich」 Rolf Schimitd-Holz (Hg) 前掲書所収
- (24) H. Meyer 「Faschismus wie eine Mode」 Raimund Hethy/Peter Kratz (Hg) 『In bester Gesellschaft-Antifa-Rechte zwischen Konservatismus und Neo-Faschismus』 Die Werkstatt 1991, 286p
- (25) Ingo Hasselbach 『Die Abrechnung』 Aufbau-Verlag 1994, 120-121p
- (26) 木谷勤は、70年の歴史教科書について、歴史を動かす原動力として人民闘争の役割が強調され、闘いの中での人民の苦しみと喜び、失敗と成功の原因の分析などに大きなスペースがさかれている点に長所をみていた。現代以後はその運動の否定的要因や現象についてのやや「臭いものに蓋」式の態度が目立つのが気になる指摘していた。木谷「ドイツ民主共和国の学校制度と歴史教育」同編訳『世界の教科書＝歴史・ドイツ民主共和国5』ほるぷ出版, 1983所収,
- (27) 『Glatzen am Alex』 Edition Fischerinsel, 1990 117p

- (28) Hermann Lager 『Flächenbrand von rechts』 Verlag Jugend und Geschichte 1993, 8p この部分の叙述が先述の会議での発言であることは、9月13日の同氏の自宅でのインタビューで確認。同氏はもと歴史教育者。
- (29) Hermann Lager 前掲書 8p, 旧東ドイツ北部の研究者とはロストック大学の歴史学科, 特にカール・ハインツ・ヤーンケを中心とする青年運動史研究者のグループであった。
- (30) 9月8日のロータ・エルスナーのインタビューの際のコッホの発言。エルスナーは元ロストック大学歴史学科教授。以後のコッホとエルスナーの発言はこのインタビューでのもの。
- (31) Kurt Pätzold 「Zur Diskussion mit Rechten」 『Vorwärts in die Vergangenheit?-Argumente gegen Rechts』 edition Ost 1994, 76p. これは1993年10月23日にベルリンで開かれたPDSの反ファシズム会議のテキストである。ペッツェルトは、この本の紹介によると国際的に知られたファシズム研究者で統一後フンボルト大学をやめさせられている。なお、この中でペッツェルトが旧西ドイツと日本の歴史教育について述べている箇所は考えさせられる。即ち、彼は「例えば日本では誰も学校で日本の軍隊の犯罪について講義する機会を持ってなかった。西ドイツではそうではない。」と言っている。西ドイツの歴史教科書がドイツ1000年の歴史がすばらしく、厳かなものであり、12年間をのぞけば正常であるという筋で書かれていることがドイツに優越感をもたせるのに効果的だと指摘している。ドイツの教科書も現代だけでなく全体的に分析されねばならない。
- (32) 生田周二 「ドイツ青年と極右主義—ドイツ統一をめぐる社会批判的青少年研究の動向と課題」 『日本社会教育学会紀要』 No.30, 1994 参照。生田によれば、この活動は青少年の自立を援助するために、彼らの行為を排除するのではなく、人格を尊重する姿勢に指導者自身が立つことが重要だと言われているが、そのことが無価値性につながったり、一体感の強調により右翼的指導者しか青少年の気持ちを分かりあえないという宿命論に陥るケースもみられるという。

引用した以外のドイツ語参考文献

Philip Cohen 『Verbotene Spiele-Theorie und Praxis antirassistischer Erziehung』 Argument-Verlag 1994

Hans-Uwe Otto/Roland Merten (Hreg) 『Rechtsradikale Gewalt im vereinigten Deutschland』 Leske+Budrich 1993

Klaus Farin/Eberhard Seidel-Pielen 『Ohne Gewalt Läuft nicts!』 Bund Verlag 1993

Bundeszentrale für politische Bildung (Hg) 『Aus Politik und Zeitgeschichte』
B2-3/93, 8. Januar 1993

Andreas Borchers 『Neue Nazis im Osten』 Belz Verlag 1992

Gö ts Eisenberg/Reiner Gronemeyer 『Jugend und Gewalt』 Rewolt
Taschenbuch Verlag 1993

Klaus Riedel/Martin Griwatz/Hans Leutert/Jürgen Westphal 『Schul im
Vereinigungsprozess』 Peter verlag 1994